



6
June 2019
No.767

現代の金の栽培に挑戦—



日本遺産

—Japan Heritage—

日本遺産(Japan Heritage)

は、地域の歴史的
魅力や特色を
通じて我が国の
文化・伝統を語
るストーリーを
文化庁が認定する
制度です。

このたび、「みちの
くの金」に関する歴史・
文化をまとめた「みちの
くGOLD浪漫—黄金の国
ジパング、産金はじまりの



地をたどる」が
令和元年度の認定
ストーリーの一つ
に選ばれました。
改めて伺います。
皆さんは、ご存じ
ですか？
みちのくからはじま
る日本の金の歴史。
それはたった一粒の砂
金から始まりました。
▼日本遺産の問い合わせ
先 生涯学習課文化財
保護班 ☎43-2101

文化庁では、日本の文化財
や伝統文化を通じた地域の活
性化を図るためには、その歴
史的経緯や風土に根差した世
代を越えて受け継がれる伝承、
風習などを踏まえたストー
リーの下に有形・無形の文化
財をパッケージ化し、活用を
図る中で、情報発信や人材育
成・伝承、環境整備などの取
り組みを効果的に進めること
が重要としています。

その一つとして、地域の歴
史的魅力や特色を通じて日本
の文化・伝統を語るストーリー
を「日本遺産(Japan H
eritage)」として認定
し、ストーリーを語る上で不
可欠な魅力ある有形・無形の
文化財群を総合的に活用する
取組を支援しています。
世界遺産や文化財指定は、
登録・指定される文化財の価
値付けを行い、保護を担保す
ることを目的としています。
一方で日本遺産は、価値付け
や保全のための新たな規制を
設けるのではなく、地域に点
在する遺産を「面」で活用し、
発信することで地域活性化に
つなげることを目的にしてい
ます。





浦谷町教育委員会佐々木一彦教育長(中)・陸前高田市岡本雅之副市長(左)・南三陸町最知明広副町長(右)が、認定証交付式に出席し、認定証を受領。



浦谷町では、平成28年度は宮城県気仙沼市や岩手県平泉町、陸前高田市の2市2町で、平成29年度に宮城県南三陸町が加わり2市3町の「みちのくの金」にまつわる歴史を有した自治体連携で日本遺産の認定に2度挑戦。しかし、残念ながら認定には至りませんでした。

ただ2度目の挑戦では、認定まであと一步の最終ヒアリングまで残りました。不採択後の敗因確認の際に、文化庁からの「あと一步でした。日本遺産にとって『金の歴史』

はなくてはならない。頑張ってください」という激励を受け、各市町の担当者たちは確かな手応えを実感。

担当者たちは、2度目の不採択後、3度目の挑戦を満場一致で決めました。

認定を目指し、私たちが暮らす地域が持つ歴史や文化と何度も向き合い、時には、みちのく各地に存在する金山・鉱山の跡地やみちのくの金をもたらした景観の調査を行うなど、「みちのくの金」にまつわるストーリーを磨き上げてまいりました。

また、机上での作業だけではなく、日本の財に導くため、地域の財として機運を醸成するため、各市町で開催されるイベント出店によるPR活動や「玄米食向け金のいぶぎ」の地域ブランド米化を通じた情報発信、一般からも参加者を募り、自然の沢で行った砂金採りなど、さまざまな取り組みを展開してまいりました。

平成31年1月18日に3度目の申請を行い、令和元年5月20日に、72件の中から選ばれた16件の一つとして日本遺産に認定されました。

三度の目の正直で手にした 日本の財たからとしての称号



日本遺産

「みちのくGOLD浪漫」を

構成する歴史遺産

宮城県と岩手県にまたがる「みちのくの地」にあり、日本遺産として認定された「みちのくの金」にかかわる歴史遺産は、43件。

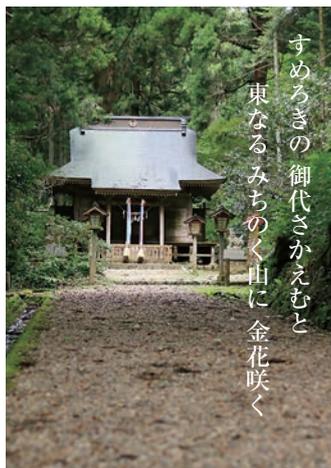
その一部について、日本初の産金から近代に至るまで、各時代ごとに紹介します。

奈良時代―日本初の産金―(涌谷町)

749(天平21)年に、陸奥国は小田郡から金が採れたことを都に報告。時の天皇・聖武天皇が造営を進めていた東大寺盧舎那仏の不足する鍍金の原料として900両(約13kg)の砂金が献上されました。

このことを日本始まって以来初めての産金と大いに喜び、国家事業であった盧舎那仏の造営を完成に導きました。その時のことを、万葉の歌人・大伴家持が詠んだ歌が「万葉集」に残されています。

その後、砂金採りは人々の間に広まり、産金の中心は、宮城県北部から岩手県南部の海沿いに広がる三陸地方へと移っていきました。



産金の歴史を伝える黄金山神社

すめろぎの御代さかえむと

東なるみちのく山に金花咲く

平安時代―皆金色の理想郷―(平泉町・南三陸町)

1124(天治元年)年に中尊寺金色堂を造営した奥州藤原氏は、栄華を極めたこの世に争いのない平和理想郷を平泉に造りました。

その源になったのが、三陸地方の気仙・本吉で採れた砂金です。

気仙沼市と南三陸町にまたがる田東山には、産金の地を守るかのように奥州藤原氏が信仰した経塚や遺跡が残されています。

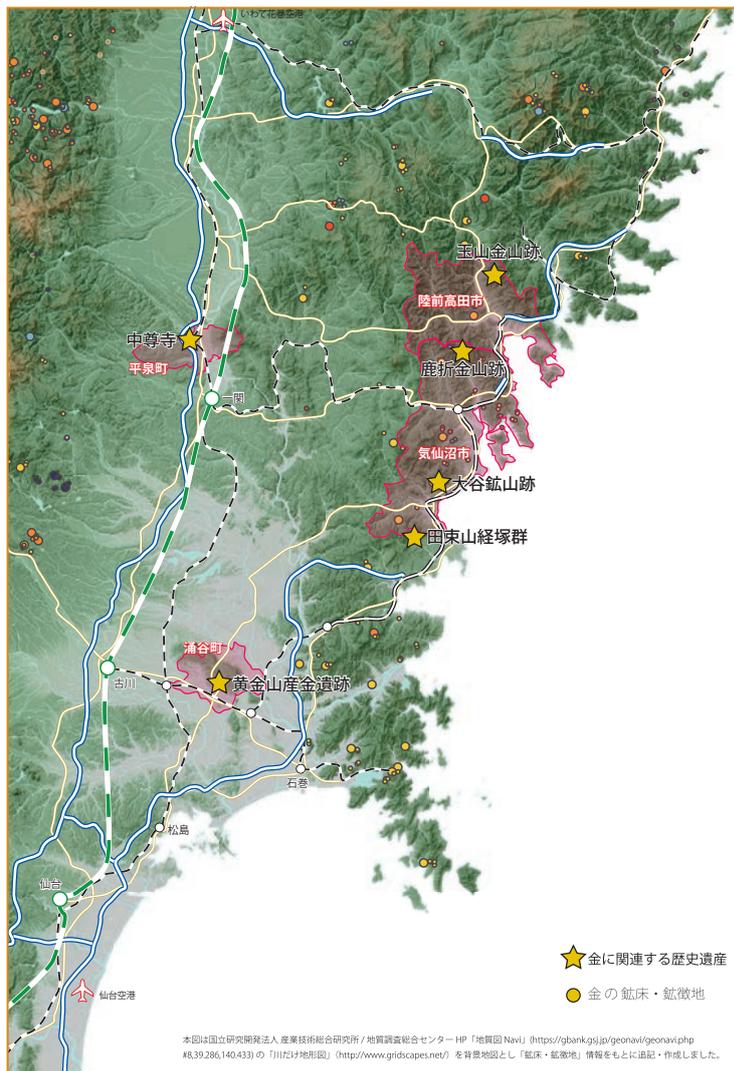
後にマルコポーロは「東方見聞録」に「黄金島ジパンク」と記し、はるかヨーロッパ世界まで「みちのくの金」ことが伝えられました。



奥州藤原氏の黄金文化の象徴「金色堂」



頂からは三陸地方を一望できる「田東山」



江戸時代―伊達文化を支えた金山―(陸前高田市)

三陸地方では鎌倉時代以降も脈々と金を採り続け、江戸時代には仙台藩を治めた伊達家は、現在の陸前高田市にある玉山金山などから産出した金を財政の支えとしたといえます。玉山金山には多数の坑口や金を採した後に残された無数の金鉱石のかけらが、雪が積もっているかのように広がっており、相当の産金量を誇ったことを物語っています。



金山山頂に鎮座する守り神



雪のように広がる白い金鉱石のかけら

往時は坑道を中心に町が形成されるほど、金掘り人夫でにぎわい、「玉千軒」と呼ばれる町並みが築かれていたと伝わります。

花咲け！

みちのくGOLD浪漫

「みちのくGOLD」を
日本の金山、日本の財^{たから}へ。
そして、黄金の国ジパングの
根源としての誇りを醸成。

砂金採りが地域に浸透し、金鉱山の開発が進められる中で、産金で名を成した山々は地域に安定をもたらす聖地となり、「金」と人々の縁によって生み出された文化は、「里」や「海」の人々へも伝播し、祝いや祈り、活気やにぎわいの象徴として脈々と人々に受け継がれてきました。採金に用いられた道具類は、「里」の生活に溶け込み、山の神に奉納された太鼓の音や作業唄は「海」の文化と融合して港町を彩る独特の芸能が開花しました。

私たちは、みちのくの地が育んだ山川と里、海とともに生きる風土の中に根付いた「金」との縁を「みちのくGOLD」と名付け、価値や魅力の掘り起こしを始めました。文化や信仰、産業、ありとあらゆる生活の中に隠れた「みちのくGOLD」の発見は、マルコ・ポーロが「黄金の国・ジパング」と称した理想郷にも劣らない、きらめく浪漫に満ちあふれています。そして、今回の認定を機に、私たち2市3町は、日本遺産「みちのくGOLD浪漫」を

地域活性化の戦略の一つとして掲げ、10年後のさまざまな人が行き交うJR東京駅構内で「日本の金山といえば」という問いに対して国民の誰もが「みちのく」と答えるよう、「地域の財」が「日本の財」である誇りの醸成や「みちのくGOLD」にかかわる歴史遺産の持続的な地域資源化、「日本唯一の黄金観光交流ルート」の確立、「持続可能な自立した生業の創出」などに取り組み、震災からの完全なる復興へとつなげてまいります。

近代―日本最大の金塊を採掘した鉱山―(気仙沼市)

1904(明治37)年に、モンスタールゴールドは、突如その姿を現しました。その地は、鹿折金山。採掘された金鉱石は重さ2・25kgに対して金の含有率が約83%という大金塊でした。

同年にはアメリカで開催された万国博覧会に出品され、モンスタールゴールドは世界中を驚かせました。この年は、日露戦争が始まった年であり、戦費調達に役立つたとされ、その逸話は、司馬遼太郎の小説「坂の上の雲」にも登場します。また、昭和の時代に入ると佐渡金山を上回る量の金を産出した大谷鉱山が隆盛を極めました



モンスタールゴールドを産出した2番坑



往時の隆盛をしのばせる大谷鉱山跡地

平成最後の

桜まつり

平成31年4月6日(土)から平成最後の桜まつりが開催されました。

例年よりも暖かい3月下旬の気候によって桜の開花が早まると思われましたが、花冷えの降雪があったことで、今年の桜まつりは、東北軌馬競技大会をはじめ、美しい桜に彩られての開催となりました。



人馬一体の勇姿を引き立てる
爆ぜる砂に、沸き立つ歓声—





芸能ショーの後継イベントとして桜の縁でつながった涌谷町の芸能・音楽・ダンスなどの団体が結束し開催した「桜縁フェスタ」。

咲き始めの城山公園に、芸能と音楽の花が咲き誇りました。

初開催

桜縁フェスタ

